

まだ熊本女子大学だった1989年に、東京から赴任してきた。所属は、文学部国語国文学科だ。

留学生センター所属の知り合いの日本語教師は、大学の運営に関与できないとぼやいていた。当時はまだバブルで、学部の先生が海外の大学へ出かけていって勝手に提携、受け入れる留学生の数が増えていた。そして、その留学生たちの日本語を引き受けるのは日本語教師だ。「大学運営にたずさわれる」、熊本に来られてうれしいと述べる時、くり返した。

大学では、専門性が重視される。日本語学校からうつり、低く見られるだろうと思っていた。語学は学問でなく、語学教師には「専門」がないと思われる。中でも日本語は、日本人なら誰でも教えられると思われがちだった。

私は自分のやりたいことをやるだけだからいいが、日本語教育自体が低く見られるのは困る。とりわけ、日本語教師を目指す学生に不利益があってはならない。

日本語教師なんだから、日本語をまなぶ学生のため、現代日本語とか教授法の勉強をしなければならない。日本語学校在職中に形態論や日本語音声の論文を書いていた。「国語国文学科」の所属となり、言語学的な日本語分析力とポルトガル語、そして、日本語教師であることが活かせると考え、赴任してからキリシタン資料、中でも、ジョアン・ロドリゲスの文法書に目を向けるようになった。

キリシタン資料の存在は、学生時代から知っていた。最初は、南不二男の日本語学概論だったのだろうか。院にすすむと、阪田雪子の授業を受けた。当時の日本語学専攻の教授で、亀井孝の妹だ。兄に言われてキリシタン資料の勉強をしたという。その阪田先生から、大塚から西ヶ原にむかう都電の中で「ポルトガル語専攻でいらしたんでしょ？ 『日葡辞書』はお読めになる？」と聞かれたことがある。「わかりません」とは言いたくなかったのだろう、「いいえ。文字が重なって書かれているので、読み取るのさえ難しくて、...」。『日葡辞書』は、活字の本だ。私は、どこかで見た手書きの資料のことを答えたようだ。

赴任してまもなく、熊本の国語学の研究者の集まりで発表する機会を得た。その時は、日本語教師養成の授業について話をした。発表が終わると、熊本大学の坂口先生が声をかけてくださり、九州大学の国語学講座が中心となっている、筑紫国語学談話会にさそってくださった。毎月研究会がある。行ってみて、キリシタン資料の重要性がよく分かった。キリシタン資料というのは、16、17世紀にイエズス会士たちが出版した日本語教育のためのリーダーと文法書と辞書のことだ。日本語の歴史を知るために、なくてはならないものなのだ。

やはり、赴任してまもなく、国語学の江口先生から「小文典を訳しなさいよ」と言われた。そのころ、『小文典』の訳はまだ出版されていなかった。影印を見てみたが、とてもできない。「ポルトガル語ができるんでしょ？」と言うが、かすれていたり欠けていたりする活字がある。完全に読みとれれば訳せるというわけでもないが、読みとれない文字があると、もうお手上げだ。日本語なら、内容を見ながら欠けた文字や活字を補い、補いながら内容を特定していけるだろうが、外国語だからそうはいかない。まず、文字が読み取れないことには、何が書いてあるのかわからない。

そんなこともあり、また、語句の意味や、言語作品より、言語の体系、構造の記述に興味があって、土井忠生の翻訳が出ている『大文典』を読み始めた。日本語とバイリンガルのポルトガル語話者の頭の中をのぞくことができるわけで、スリリングだった。

訳と島正三の影印とを読んだ。原典『ARTE GRANDE』に「elegância, elegante, elegantemente」が多いことには、だれでも気づく。「elegância, elegante, elegantemente」は、それぞれ英語で「elegance、

elegant, elegantly)、「エレガント」の形容詞、名詞、副詞だ。『ARTE GRANDE』にあらわれる実際のつづりにはゆれがあるし、形容詞には複数形も現れる。日系ブラジル人の学生に頼んで、影印の「エレガント」すべてに付箋をつけてもらった。見られた語形は、「elegancia, elegância, elegante, elegãte, elegantes, elegãtes, elegantemente, elegãtemente, elegantemête, elegãtemête」の十だった。

今でもはっきり覚えている。非常勤で行っていた熊本商科大学（現在の「熊本学園大学」）の留学生で、赴任した年だったかもしれない。キャッスルホテルで待ち合わせをするつもりが「キャピタルホテル」と言ってしまう、「先生は「キャピタルホテル」と言ったが、熊本に「キャピタルホテル」はない」と言いながら、キャッスルホテルのロビーに来てくれた。日本に残っても「trabalho braçal（腕の仕事＝肉体労働、単純労働）」しかない、不安な顔をのぞかせた。ちょうど日本の出入国管理法が変わり、日系ブラジル人の受け入れが開始した年だった。

『ARTE GRANDE』の全242葉（『ARTE GRANDE』は、「頁」でなく「葉」でかぞえる。「葉」は枚数のことで、第1葉の表が第1頁の場合、第1葉の裏が第2頁となる）に104個の「エレガント」がある。elegância か elegante か elegantemente が4頁に1回あらわれることになる。「倒置、省略、短縮」について記述した第168葉裏には、その頁だけで三つだ。

『ARTE BREVE』（ロドリゲス自身が1冊目の著作を『ARTE GRANDE』（大きい文典）、2冊目を『ARTE BREVE』（短い文典）と呼んでいる）の「学習法、教授法」についての記述では、第2葉裏から第5葉裏に32個、各頁にはほぼ二つ、第3葉裏、第4葉裏、第5葉表には三つずつある。

これらの「エレガント」合わせて136個すべてを一覧表にした。一番左の列が「通し番号」、それから「つづり」、「原本葉」、「訳書ページ」、「事項」、「分類」、「説明、または、例」、そして、「エレガント」を含む文の要約だ。調べていくうちに、学生が見つけてくれた「エレガント」と土井訳『大文典』の索引との間に食い違いがあることに気が付いた。

『大文典』の索引を見ると、Elegancia, Elegante, Elegantemente の訳語は「上品」か「典雅」で4頁以下に現われ、Modo elegante de falar, Modo de falar elegante の訳語は「上品な言ひ方」で40頁以下に現われる。

私の作成した表によると『大文典』の6頁、474頁、486頁、492頁にあたる『ARTE GRANDE』に「エレガント」は、ないことになっている。調べてみると、6頁には、「この国語の特徴と観られるのは、殆どあらゆる場合の言ひ方に含まれてある尊敬及び丁寧の仕方に於いて豊富であり典雅であるといふ事である」とある。この原文は「no que esta lingua se assinala, & he diuersa de quantas temos noticia, he na maneira de respeitos, & cortesias que incluye nos modos de falar quasi vniuersalmente」で、「エレガント」も「典雅」に相当する語もない。そして、474頁だが、ここに「上品な言ひ方」はない。あるのは、「優越感を有する言ひ方である事に注意せよ」で、第130葉表の当該箇所は「nota Superioridade no falar（英語で、note superiority in the speaking）」である。やはり、「エレ

索引	11
上品(典雅) Elegancia, Elegante, Elegantemente	4・5・6・11・13・29・35・41・43・47・52・59・67~8・72・78・81・85・89・93・193・202・207・306・308~9・319・321・323・326・333・362~3・366・375・393~5・405・408・414・432・436~7・441・444・453・462・468・471・476~8・482・486・489・496・505~6・529・533~4・541・551・553・557・568・588・602~4・615・640・651・661・663
上品な言ひ方 Modo elegante de falar, Modo de falar elegante	40・54・73・105・388・443・447・474・492・508・514・518・526・546・603・664

『大文典』の「索引」から

ガント」はない。

「索引」の486頁は馬場の表で487頁となっていて、これは馬場の間違いだ。492頁は馬場で491頁となっていて、これは「上品な言ひ方」が両ページにまたがっているからだった。

土井の索引の「6」と「474」は、間違いだ。原文にない「エレガント」を表示してしまっている。

馬場の表にあつて、土井の索引にない「エレガント」は、302、449、514、515、546、605、650、678頁そして、316頁に二つである。すべてを『大文典』にあたってみると、514、515、546、605、678頁の五つが「上品」、302、650頁と316頁の二つの計四つが「典雅」、そして、449頁が「品位」と訳されていた。原典にもあるし、訳出もされているものが索引にあげられていないのだ。出版を急いだに違いない。

6頁の「エレガント」が原典にあつて索引にない点は、原典を見ずに訳を見て索引を作ったことを思わせる。474頁「優越感を有する言ひ方」を「上品な言ひ方」にカウントした理由は、分からない。

『ARTE GRANDE』と『大文典』とを見くらべていると、ほかにも気づくことがある。それは、翻訳のきめ細かさだ。たとえば、可能性を意味する言い方に関する記述の85頁にある活用表である。

○ 大 過 去	
Agueôzu (上げうず)。	}
Aguete atta cotomo arôzu (上げてあつた事もあらうず)。	
Agueta monode gozarôzu (上げたものでござらうず)。	
○ 未 来	
Agueôzu (上げうず)。	}
Aguru cotomo arôzu (上ぐる事もあらうず)。	
Agueino xôzo (上げもせうず)。	
Agueôzurô (上げうずらう)。	

原典では第19葉裏にあり、以下のとおりだ。

§ <i>preterito Plusquam perfecto.</i>	
Agueôzu,	} <i>Offrecer a eu, ou podera ser ofrecido, pode ser que tenha ofrecido,</i>
Agueteatta cotomo arôzu.	
Agueta monode gozarôzu.	
§ <i>Futuro.</i>	
Agueôzu.	} <i>Poderey eu ofrecer, ofrecerey, pode ser q̃ offreça.</i>
Aguru cotomo arôzu.	
Agueino xôzu.	
Agueôzurô.	<i>Parece que ofrecerá, pode ser que offreça.</i>

土井の『大文典』では、の部分が訳出されていない。もともとが、「Agueôzu」、「Agueteatta cotomo arôzu」など、のポルトガル語訳なのだから、わざわざ日本語に訳しなおす必要がないと判断したのかもしれない。訳すなら、一つ目は「私は上げた、上げることができた、上げることができただろう」、二つ目は「私は上げることができただろう、私は上げるだろう、上げるかもしれない」、三つ目は「上げるだろうようだ、上げるかもしれない」となる。

一方、希望、願望を表わす言い方の記述の125頁にある活用表の訳は、丁寧だ。

○希求法の現在及び不完全過去

○Yomecaxi, l. gana (読めかし, 又は, がな)。 } 読めばよいが。第二人称・
 Yomai caxi, l. gana (読まいかし, 又は, がな)。 } 第三人称に。
 Yomitai, l. monogia (読みたい, 又は, ものぢゃ)。 } 読みたいことだ。第一人
 Yomitai cotonô (読みたい事なう)。 } 称に。

○完全過去

Yomô monouo (読もうものを)。
 Yôde araba yocarô monouo } 読めばよかったのに。
 (読うであればよからうものを)。 } デウスよ, 読んでおさしめ給へ, 読んでお
 Yôdarôniaua yocarô monouo } くべきであったのに。
 (読うだらうにはよからうものを)。

該当する第 29 葉表の活用表にあるポルトガル語訳が要領よく訳出されている。

¶ *Presente, & Imperfeito do modo Optativo.*

¶ Yomecaxi, l. gana. } *Oxala leras tu, ou leßes, lera elle,*
 Yomai caxi, l. gana. } *ou leße &c.*
 Yomitai, l. monogia. } *Oxala lea eu, ou leße.*
 Yomitai cotonô. }

¶ *Preterito perfeito.*

Yomô monouo. }
 Yôde araba yocarô monouo. } *Oxala leße, ou queira Deos que tenba eu lido,*
 Yôdarôniaua yocarô monouo. } *ba que ouuera deier lido.*

『ARTE GRANDE』は語学書だから、日本語の例文とそのポルトガル語訳とが頻出する。『大文典』では、ローマ字表記の例文に漢字仮名まじりの翻字がついている。しかし、第 385 頁から 387 頁までの「非人称動詞について」と「不定法動詞の構成」の「附則一」だけは、例文のポルトガル語訳とそれの日本語訳とがくわえられている。

「非人称動詞について」の一部。

○明白な主格を持ったものは次のやうに用ゐる。例へば, Cono mexiua curauarenu. (この飯はくらはれぬ。) Iste arroz não se pode comer. (この飯は食ふことができない。)

Cono michiua arucarenu, l, icarenu. (この道は歩かれぬ, 又は, 行かれぬ。) Iste caminho não se pode andar. (この道は歩くことができない。)

Cono ixiua amarini catôte quirarenu. (この石は余りに堅うて切られぬ。) Esta pedra he tão dura q̄ se não pode cortar. (この石は切ることができないほど堅い。)

Cono jiuua narauarenu, l, cacarenu. (この字は習はれぬ, 又は, 書かれぬ。) Esta letra não se pode aprêder (この文字は習ふことができない), などの意。

等をとる事を知って置くがよい。例へば、Tada ima vomeni cacaru cotoua caguirigia. (只今御目にかかる事は限りぢゃ。) He a vltima vez que vos ei de ver. (私があなたの御目にかかる事の最後である。) の意。Monouo mōsu cotoga yoi. (物を申す事がよい。) Mairu cotomo arōzu (参る事もあらうず), 等。

活用表の翻訳に見られる温度差、例文へのポルトガル語訳にくわえられた、部分的に見られる日本語への翻訳、これらはどうして生じたのだろうか。

土井 (1955) の日本語文のローマ字表記がBodleian版のマイクロフィルムのそれと違うことがある、ということにも気がついた。馬場 (2015) では、その異同を一覧表にした (第9章「Bodleian本と訳本とのローマ字つづりの異同」を参照)。その数は、531箇所におよぶ。

単なる不注意による写し間違いと思われるものは、「mōxinaita」を「nōxi naita」に、「Degozare caxi」を「Degozare cax」、「Feiq.」を「Teiq.」、「Nacare」を「Nacarc」、「Purificaçan」を「Purificaçam」、「Iūsōbai」を「Iūsōba-」の六つだった。

ローマ字表記は分ち書きされており、スペースの位置が重要な意味を持っている。そのスペースが付け加わった例が 101、なくなった例が 107、位置がかわった例が 4 件あった。スペース同様、頭文字が大文字か小文字かにも大きな意味がある。原典での大文字が訳本で小文字になっているもの 19 件、小文字が大文字になっているものが 29 件あった。表記における句読点の重要性は言を俟たない。しかし、混乱が 10 件あった。

『ARTE GRANDE』の日本語表記には、「´」、「`」、「^」、「ˇ」、「~」、そして、ときどき「-」の補助記号が使われている。Agueózuruni が「Agueózuruni」(ó→ô) に、Rò が「Ró」(ò→ô) に、gofozonni が「gofōzonni」(o→ô)、Rōgo が「Rongo」(ô→on) など、アクセント記号の変更が 48 あった。同様に、vo neni を「vomeni」(スペース+n→m)、Coxçuo を「Goxōuo」(C→G) など、アルファベットの変更が 23 あった。これらは、活字の損傷や印刷後の紙面の汚れを日本語学的知識によって補完したものと思われる。

vorifuxi suquimo ⇒ vorifuxi sono suquimo など『ARTE GRANDE』からつづりがふえている例が 13 件、vtaíuo ⇒ vtauo などつづりがへっているものが 10 件、Fumini adzucarar ⇒ Funeni noru などつづりに変更が加えられているものが 15 件あった。どうして変えられたのか、わからない。

これらの異同には、頁によるむらがある。p.154-161、191-196、231-239、267-284、406-410、469-482、529-538、578-587、599-606、626-634、810-820 にはないが、p.20、44、53、57、85、94、95、113、167、171、246、329、342、356、357、365、381、411、542、548、565、571、671、680、686、700、707、723、727、729、737、747、784、803 には各ページに 3 件、p.8、56、112、366 には 4 件見られた。

日本語ローマ字表記の異同や翻訳の仕方にむらがあるのは、翻訳者が複数だからだ。原典と訳とを交互に仔細に見ていると、ポルトガル語力や翻訳に対する考え方が均一でなく感じられる。土井は翻訳者

たちに指示を出し、全体を眺めて統一したはずだが、足りなかった。出版をいそいだに違いない。この書の日本語史研究への貢献は、測り知れない。それは、翻訳者全員の氏名を記載して損なわれるものではない。

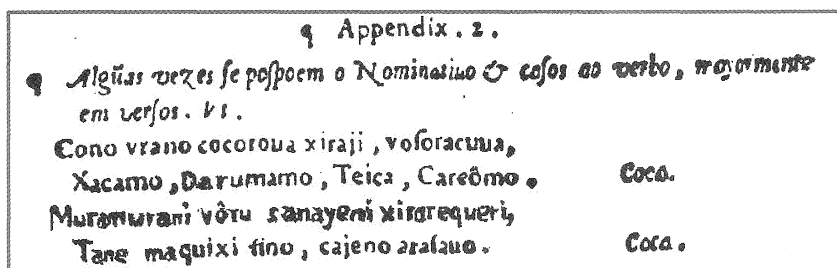
驚くのは、土井が引用し間違えているのに、その間違いを原典の誤りとしているものがあるということだ。

土井 (1955) p.20 の「tçucuru」には脚注があり、「正しくは tçuquru」となっている。が、原典第4葉を見ると *tçuquru* である。同じく、p.356 「Amauosoi (雨襲)」に「Amauouoi (雨覆) か」とあるが、原典では *Amauouoi* だ。p.690 「Dombôrin」の脚注は「Dembôrin とあるべきもの」だが、原典で *Lembôrin* となっている。p.740 「Zôquan」の脚注は「Zôquan の誤」だが、そもそもの原典が *Zôquan* だ。

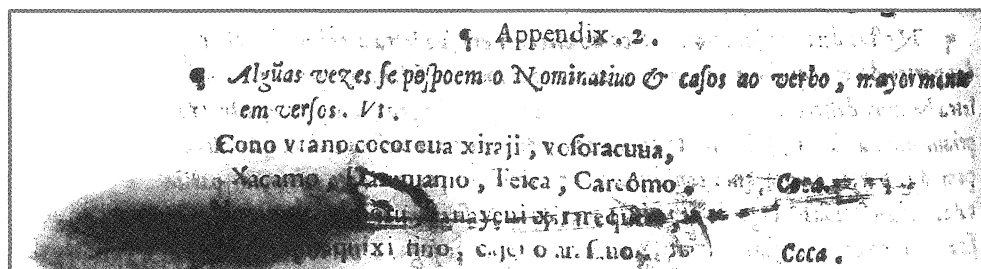
『ARTE GRANDE』は、なにしろ古い書物だ。印刷技術も未熟だったし、紙面もずいぶん汚れている。また、当時の機材は酷使されていたに違いない。だから、アルファベットや補助記号が欠けていたり、読めなくなっているのや、スペースがあるのかないのか判別が難しいのもやむを得ない。しかし、読める文字、見える記号を間違えて引用し、そのつづりを「誤っている」と指摘している。土井は、校正のとき原典の日本語ローマ字表記を見ていない、ということになる。

Bodleian 図書館からマイクロフィルムを取り寄せるまで、『大文典』の影印は島正三『ロドリゲス日本大文典』文化書房博文社、1969 にもとめていた。しかし、研究を始めて、すぐに、その影印があてにならないことに気づいた。島 (1969) の p.480 「あとがき」に「底本は、『日本には写真で、ごく少数が伝えられている』(国語学会編・国語学辞典) ところの写真のひとつによるもので、文字の不鮮明な部分を浮きあがらせるために、余分な陰影を消してみたり、かなり補筆したりして、こうする手間が全ページに及んだ。私意を加えたこととなるのであるから、そのむねをことわっておかなくてはならない。」とあるとおり、原典とは「かなり」違うのだ。

例えば、島の第 83 葉裏は、以下のとおりだ。



Bodleian 本のマイクロフィルムは、以下のようだ。



この箇所、Crawford 本ではまったく汚れていない。読めない部分を書き写してきた。

Xacamo, Darumamo, Teica, Careômo.	Coca.
Muramurani vôru, fanayeni xirarequeri,	
Tane maquixi fino, cajeno arafauo.	Coca.

島では、「fanayeni」の「f (s の異体字)」が「s」に変わっている。

島 (1969) に底本が Bodleian 本か Crawford 本かは、書かれていない。『国語学辞典』にも、「伝えられている」写真がどちらのものかはない。しかし、島の影印の底本は、Bodleian 本に間違いはない。

島は、Bodleian 本を底本とし、少なくともこの第 83 葉裏の補正、補筆に Crawford 本を参照したことが分かる。では、どのような理由で原本の「f」を「s」にかえたのか。島自身が、アルファベットの異体字に意味を見出さなかったのか、あるいは、「f」を「s」に変えることに躊躇しない誰かからの情報をもとにしたのか。

ロドリゲスは、日本語を「エレガント」だと言っている。16、17世紀の西欧世界で、学習の対象となる言語は古典ラテン語だった。そして、その古典ラテン語に求められたのが、urbānitas (「都会的」、つまり、「ローマ風であること」)、venustās (魅惑的であること)、そして、ēlegantīa (エレガント)だ。ロドリゲスは、日本語はエレガントだ、古典ラテン語におとらないすばらしい言語だと主張し、日本語教師としてその教育と学習を鼓舞した。

そして、もう一つ。「エレガント」は、「この語、項目、表現は重要だ」というマークとして使われている。ロドリゲスは優秀な教育者であり、イエズス会は現実的な修道会である。

一方、数は少ないが印象的な語がある。「sonsonete」だ。

きっかけは、筑紫国語学談話会だ。「エレガント」について発表した折り、当時九州大学の大学院生だった木部さんが手をあげて、「ソソソネーテというのは何を意味しているんですか」と質問してくれた。その時は、うまく答えられなかったんじゃないかと思う。木部さんは、鹿児島大学で教鞭をとり、今は国立国語研究所の副所長だ。

土井の索引を見ると、「ソソソネーテ」だけに説明がついている。

ソソソネーテ Sonsonete (皮肉な言ひ方などに於ける鼻にかかるやうな抑揚のある発音) 62・79・90・608・610・620・637

『大文典』の索引から

「sonsonete」の意味を最初に日本語で解説したのは橋本進吉だろう。橋本は「國語に於ける鼻母音」『方言』第二巻第一號、1932で、『ARTE GRANDE』の記述を翻訳し、「ロ氏 (ロドリゲスのこと) の語典を根據として、室町末期に近畿、其他の國々に右のやうな鼻母音があつた事を信じてよからうと思ふ」としている。東北方言にあるような有声子音の前の母音の鼻音化が近畿地方でも行われていたというのである。雑誌の巻頭を飾る画期的な研究だ。

第2頁には、以下のような引用 (訳) がある。

D, D' の前の もろもろ の母音は、常に、半分の til (橋本氏語に於ける 鼻化 の符號である) もろもろ、又は、til に幾分近づく鼻の中で作られる sosonante (反語をもちふ漢語上の調子) の如く發音する。例、māda, mīdo, mādōi, nādame, nādete, nīdo, mādzu, āgiuai, āguru, āgaqu, cāga, fanafāda, fāgama, 等

この「音化」は「鼻音化」の、「sostonante」は「sonsonete」の誤りだ。

『ARTE GRANDE』の該当箇所は第 177 葉裏で、以下のとおりだ。

*Toda a vogal, antes de, D, Dz, G, sempre se pronuncia como com
hum meyo til, ou sonsonete que se forma dentro dos narizes o qual toca algum
tanto no til. Vi, Māda, mídö, mádoi, nādame, nādete, nído, mādzu,
āgiuai, āguru, āgaqu, cága, fanafáda, fágama, &c.*

語例を活字で打ち直すと、以下のようになる。

Māda, mídö, mádoi, nādame, nādete, nído, mādzu,
āgiuai, āguru, āgaqu, cága, fanafáda, fágama, &c.

見くらべると、橋本（1932）の語例に以下の変更が見られる。

Māda → māda	mídö → mído	nādame → nādame
nādate → nādate	nído → nido	mādzu → mādzu
āgiuai → āgiuai		

大文字が小文字になっていたり、「ö」が「o」、「i」が「i」、「j」が「i」になっていたり、もつとも目につくのは、マクロン「-」がチルダ（til）「~」になっていることだ。アルファベットの補助記号は、かな、漢字の一面と同じで、文字そのものを変えてしまう。変更は、許されない。第一、ロドリゲスは「喉分の til」、「til に幾分近い」と言っているのではないか。「sonsonete」は、「til」ではないのだ。他にも、4 頁では「N 又は明瞭な til を置いてはならない」とロドリゲスから引いている。ロドリゲスはチルダ「~」でないことを示すためにマクロン「-」を使ったのであり、「~」を「-」に変えるなど言語道断だ。

この論文は、橋本の論文集『國語音韻の研究』岩波書店、1950 に再録され、ここでも巻頭を飾っている。第 3 頁の同じ引用を見ると、

D, Dz, G の前のあらゆる母音は、常に、半分の til（葡萄牙語に於ける鼻音化の符號である）あるもの、又は、til に幾分近い、鼻の中で作られる sostonante（反語をあらはす演説上の調子）の如く發音する。例、māda, mídö, mádoi, ndame, nādete, nído, mādzu, āgiuai, āguru, āgaqu, cága, fanafáda, fágama, 等

マクロンはチルダのまま、mído は mídö に、nido は nído にもどされている。が、nādame を nādame にしてあるのをさらに ndame に、fanafáda でよかったものを fánafáda にしてしまっている。あまりにも雑だ。

引用は雑だし、マクロンをチルダに変えるのは作為的だ。鼻音化していたことを言いたくて、「~」にしたのだろう。

ただ、本当に「マクロン」なのかという疑問がのこる。活字がはっきりしないからだ。

『ARTE GRANDE』での日本語表記は立体のアルファベット「Nihon」で、ポルトガル語は斜体「Portugal」だ。マクロンは日本語にしか使われず、チルダとくらべようと思うと斜体のチルダしかない。

ポルトガル語と日本語のバイリンガルの印刷で、そこに立体と斜体がくわわると、版組の負担はかなり大きくなる。そのためだろう、『ARTE GRANDE』では立体と斜体とが入れ替っている箇所がある。第2葉裏から立体の「nãõ, declinação, sãõ」を抜いてきて、「Māda, nādame, nādete, mādzu, āgjuai」と並べてみた。

nãõ declinação sãõ
Māda nādame nādete mādzu āgjuai

「Māda」以下の補助記号はマクロン「-」であって、チルダ「~」ではない。

国語学の集まりで発表し、懇親会をはやめに辞しようとする、まだ若い研究者が「論文を再録した『國語音韻の研究』は橋本の没後、教え子たちが編集したものだ」と言いに来てくれた。再録も橋本によると言った私の誤謬について、一矢報いたかったのだろうか、国語学の権威のために。でも、橋本がマクロンをチルダだと言った事実は消せない。その誤りをそのまま論文集にしたのが橋本本人でなく、教え子たちだということは、教え子ともども問題だということになるだけだ。

馬場 (2015) でロドリゲスによる「sonsonete」の意味、用法を考えた (第5章「sonsonete」)。「エレガント」同様、一覧も作成した。ポルトガル語、スペイン語の語源辞典、最古のポルトガル語辞典を調べた結果、「sonsonete」の意味を「何か皮肉なことや腹黒いたくらみを口に出して言うときの発話のイントネーション」だと結論づけた。表には、『ARTE GRANDE』から九つ、『ARTE BREVE』から一つ、計10の「sonsonete」をならべた。10のうち、三つはちょっと嫌味な「もったいぶった調子」、三つは「ゆるんで田舎臭い調子」、二つが「ポルトガル語の干渉」、うち一つが「有声子音の前の鼻音性」とダブリ、二つが「有声子音の前の鼻音性」を示しているとした。

この論文を英語にし、紀要に投稿しようと思って書き直していると、2014年9月発行の『四天王寺大学紀要』第58号に山田昇平「ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete”一濁音前鼻音記述をめぐって一」を見つけた。山田は、「当該時期の“sonsonete”が従来言及される場合があるような、「皮肉性」や「鼻音性」とは関わらないものである」とし、「記述内容に疑問が残る」としながら、「“Dicionário Houaiss da língua portuguesa” (UOLによるオンライン版: <http://houaiss.uol.com.br/>)」から引用している (山田氏による訳)。

ソンソネーテ

男性名詞 (1595)

1 発音やアクセント、韻律の方法

2 (1712) 皮肉や意地の悪さをあらわす音における強調

これには、驚いた。『Dicionário Houaiss da língua portuguesa』は2冊持っており、使っているのは大きい方だ。大きい方には、2の意味しかない。どちらも第1版だが、確認しなかった小さい方には1の語義があった。

さらに、氏の指摘で、『ARTE GRANDE』にはあと三つ「sonsonete」があることがわかった。土井の索引にないもので、本文中では「抑揚」と訳されている。索引に「ソソネーテ Sonsonete」とあるのに、「sonsonete」が別にあるとは考えなかった。「抑揚」と訳されている三つの「sonsonete」の語義は、1だ。

ばげ土井は、この三つにだけ訳語を当てたのだろう。索引の説明とそぐわないからか？だとしたら、本末転倒だ。

みんな、少しずつおかしなことを言う。書いてあることを忠実に見ない。自説が先でロドリゲスの記述は、論文の材料にすぎなくなっている。

山田は、「sonsonete」を文献学的手続きに基づき、より正確に解釈するならば、辞書記述のみにならず、同時代の用例から帰納的に導かなく

てはならない」とし、「同時代のキリシタン対訳辞書『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』にみえる“sonsonete”を対訳語彙と対照し」ている。私にとって新しい資料である。

p.342で『日葡辞書』の第13葉裏の左段から右段にある「Asocona」の語義説明に「sonsonete」があらわれると指摘。「Asocona」と言った場合、「Areua」と言うのに対して“certo sonsonete”（一種のソソネーテ）が伴うとする。両者の発音が具体的にどのようなもので、どのような印象を与えるものであったかについては、確認出来ない。そのため、これについては判断を保留する」と述べ、『辞書』にあらわれる他の五つの「sonsonete」を検討して、「当該時期における“sonsonete”の基本的な意味は、結果的には豊島（1984）（あるいは“Houaiss”も）と同様に、単なる「音色・響き」と捉えるのが適当」と結論づけている。。

ボドリアン図書館の『日葡辞書』のマイクロフィルム『VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM』Companhia de Jesus, 1603で「Asocona」の語義説明を見ると、「Interi. De espanto como Areua, com hum certo sonsonete. (間投詞。ある種のソソネーテを伴って、「あれは」のような驚きを示す)」とある。この「あれは」は、現代語の「ありや？」なのではないか。だとすると、「sonsonete」には、「単なる「音色・響き」」よりもう一步踏み込んだ解釈が可能な気がする。

また、山田（2014）から、豊島正之が「「開合」に就て」『国語学』136、1984の注で「sonsonete」にふれていることもわかった。

p.141に「注11 例えば『サントスの御作業』の「言葉の和げ」中「言尾」の項に「Sonsonete das palauras」（言葉のニュアンス）とある。対応する本文は 2-65-21「帝王、サンタの…天下無双の美人なる事を見

日本語の談話の上にあるアクセントに就いて

○上述のやうに、日本人はその国語のアクセントに就いて論じながら、談話に關したものは説いてゐない。それにも係らず、発音上にはその音調、又は抑揚、又はアクセントがあり、自然の発音法がある。それによつて音節や語を極めて明瞭に區別し、他の国語と同様に同音異義語を互に區別するのである。その抑揚又はアクセントが、日本ではその色々な国々の用の方によつて違つてゐるが、全国語の中で正しくて自然なのは、「五畿内」(Goquinai)の五ヶ国のと「越前」(Yechijen),「若狭」(Vacasa),「丹波」(Tamba),「近江」(Vomi),「播磨」(Farima)のとである。「五畿内」(Goquinai)の音調や発音と異なつた抑揚、又はアクセントは正しくないといふ。それを前にも述べたやうに、日本人は「訛り」(Namari)といふが、それは立派に発音しないで、アクセントをつけるべき所につけないといふ意味である。この「訛り」(Namari)といふ語に就いて、次のやうに説か

『大文典』622頁

文章中の「抑揚」が『ARTE GRANDE』で「sonsonete」。

て、邪なる望みを起されん^{キシヨク}気色と言尾とを「サンタは」察し給いて」であり、皮肉等々とは無関係である」とある。当該箇所は、キリシタン資料集成『サントスの御作業翻字研究篇』勉誠社、1979の188頁、4行目からで、「帝王サンタの知恵のかしこさと、天下無双の美人なることを見て、よこしまなる望みを起こされん気色と、言尾とを察し給ひて、少しもとりあはぬことを宣ひ」。この「言尾」が「皮肉等々とは無関係である」のかどうか、私には判断がつかない。

研究がすすみ、『ARTE GRANDE』に私の見つけきらなかった「sonsonete」が三つあること、また、『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、『サントスの御作業』に「sonsonete」があらわれていることがわかった。前者に関しては、今年度の紀要に盛り込むつもりだ。後者に関しては、詳細に検討し、来年度の紀要に書こうと思う。

『大文典』622頁に該当する箇所で、「sonsonete」は、「tom」、「acento」という語と並列的に使用されている^{追記}。そして、ロドリゲスの頃、「イントネーション」に相当する「entoação」、「entonação」という語はポルトガル語にまだなかったようだ。これらの語義、歴史についても調べなくてはいけない。

そして、「sonsonete」にもどると、前述の1だけでもいいし、1と2の両義で使われているとしてもいい。ただ、日本語教育的に見て、また、言語学的に見ても、語には意味があり、そして、文脈に寄り掛かった用法と運用がある。この二つは明確に分けて考えなければならない。語の運用としてロドリゲスは10の「sonsonete」を「もったいぶった調子」、「ゆるんで田舎臭い調子」、「ポルトガル語の干渉」、「有声子音の前の鼻音性」の文脈で用いた。残りの三つは、1の意味で用いたのだろう。

土井の『大文典』がすばらしい書物であることは、言を俟たない。しかし、すべての翻訳がそうであるように、誤訳がある。だから、私は、原典を読む。「ソソネーテ」の発表のあと、九州大学の迫野先生から他に誤訳はないかというハガキをいただいた。細かいものはいくらでもあるが、それを列挙はしなかった。ただ、当時の正式な書きことばはラテン語で、ポルトガル語で書かれた文章の訳に旧仮名はそぐわない、と返事をした。内容に関する指摘でなかったので、残念に思われたかもしれない。しかし、旧仮名を使うのは、ロドリゲスの執筆理念そのものに関心を示していないように感じられる。そして、その感覚は、日本における『ARTE GRANDE』、『ARTE BREVE』研究すべてに喚起されるものでもある。

追記：『ARTE GRANDE』の該当箇所は第173葉表から裏で、以下のとおりだ。

¶ *Posto que os Iapoens nam tratem dos accentos desta lingoa no que toca ao falar como esta dito, com tudo no pronunciar tem seu tom, ou sonsonete, ou accentos, & modo de pronunciar natural cõ que distinguem as syllabas, & palauras muy claramente, aßi as equiuocas entre si, como as de mais : o qual sonsonete ou acento ainda que he vario em Iapam conforme ao vso de varios reynos delle, o proprio, & natural de toda esta lingoa, he o dos cinco reynos do Goquinai, & de Yechijen, Vacasa, Tamba, Vômi, Farima. E todo o sonsonete ou acento que discrepa do tom, & pronunciaçam do Goquinai, he tido por improprio, ao que os Iapoens como fica dito chamam, Namari. i. Nam pronunciar bem nem fazer os accentos em seu lugar.*

このうちの下線「Posto que os Iapoens nam tratem dos accentos desta lingoa no que toca ao falar como esta dito,」を土井は「上述のやうに、日本人はその国語のアクセントに就いて論じながら、談話に関したものは説いてゐない」、下線「como as de mais」を「(発音上にはその音調、又は抑揚、又はアクセントがあり、自然の発音法がある。それによって音節や語を極めて明瞭に区別し、)他の国語と同様に(同音

異義語を互に区別するのである)」と訳している。

「*Posto que* (たとえ〜であっても) *os Iapoens* (日本人が) *nam tratem* (とりあげない) *dos accentos desta lingua* (この言語のアクセントについて) *no que toca ao falar* (話しことばに關与するものの中で) *como esta dito* (述べてあるように)」は、「日本人が、前述したように、話しことばにおけるこの言語のアクセントについて取り上げないとしても、」という意味だ。土井は「*tratem* (取り扱う)」と「*toca* (ふれる)」の両方をともに「日本人」を主格とすると考えている。「*tratem*」は三人称複数で間違いなく「*os Iapoens*」を主語とするが、「*toca*」は三人主単数でこれを主語としえない。「*toca*」の主語は関係代名詞「*o que*」だ。

この記述のある節は「日本語の談話の上にあるアクセントに就いて」で、直前の「日本人が漢字の上で論ずる四つのアクセントに就いて」では、日本人は漢字の音の音調について詳しく取り扱っているが、日常の話しことばのアクセント、発音に関して著述でふれたものはまったくないと言っている。これを受けて、「話しことばのアクセントについて取り上げない」となる。ここでは、字音についてふれていない。しかし、土井は、「字音については論じているが、日常のこのばの発音についてふれては説いていない」と訳した。「*toca*」の主語は「*os Iapoens*」ではあり得ないし、否定辞「*nam*」は「*tratem*」にしかなかかり得ないのに、である。「アクセントに就いて論じながら、談話に關したものは説いてゐない」は、当たらずとも遠からずだが、そうは言ってもポルトガル語がそうになっていない。

「*como as de mais*」の「*como*」は英語の「*as*」で「〜のように」という意味を持つ。ポルトガル語の「*as*」は女性の代名詞複数で、土井は2行上の「*lingua* (言語)」を受けていると解釈した。しかし、そうではない。「*lingna*」は単数だから、「*as*」で受けることはあり得ない。直前の「*as equiuocas* (同音異義語)」を受けている。「他の同音異義語と同様に」と訳すべきだ。

文献目録

1. João Rodriguez (1604), *ARTE DA LINGOA DE IAPAM*, Companhia de IESV
2. 馬場良二 (2015) 『João Rodriguez 『ARTE GRANDE』の成立と分析』 風間書房
3. 土井忠生訳注 (1955) 『日本大文典』三省堂
4. 島正三編 (1969) 『ロドリゲス日本大文典』文化書房博文社
5. 橋本進吉 (1932) 「國語に於ける鼻母音」『方言』第二卷第一號
6. 橋本進吉 (1950) 「國語に於ける鼻母音」『國語音韻の研究』岩波書店
7. 山田昇平 (2014) 「ロドリゲス『日本大文典』における“*sonsonete*” —濁音前鼻音記述をめぐって—」『四天王寺大学紀要』第58号
8. 豊島正之 (1984) 「「開合」に就て」『国語学』136
9. *VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM* (1603) Companhia de IESVS